

## 日野キャンパス 「パラスポーツ交流会」 報告

2019/02/19



ランプの代わりにレスキューベンチを使った「ポッチャ」の様子

### 日野キャンパス パラスポーツ交流会

2月19日（火）、首都大学東京日野キャンパス体育館にて、スポーツボランティアプログラムの3年目（リーダー）の学生と2年目（サポーター）の学生が中心となって企画した「パラスポーツ交流会」を実施しました。

これまで、南大沢キャンパスを中心に地域の方々との交流を行ってききましたが、今回は、日野キャンパスと日野地域の関わり合いの新たなきっかけをつくりたいという目的で、本取組が企画されました。そこで、日野キャンパスのすぐ近くにある「社会福祉法人 夢ふうせん」の方々を日野キャンパスにお招きし、障がいのある人と大学生が共に楽しめるスポーツ体験や展示を行いました。

当日は、夢ふうせんから、17名の利用者の方、7名の職員の方の合計24名の方にご参加いただきました。本学からは、ボランティアプログラムの学生が10名と、ホームページを見て参加して下さった南大沢キャンパスの一般学生が1名参加し、総勢35名ぐわいの規模の交流会となりました。

#### ・ポッチャ

「ポッチャ」は、ジャックと呼ばれる白い玉にどれだけ自分のチームのボールを近付けられるかを競うスポーツです。東京2020パラリンピックの公式競技ということもあり、多くの注目が集まっています。ボールを投げるちょっとした力加減が難しく、なかなか思い通りにボールを投げられないところやカーリングのように相手のボールをはじく戦略的な投げ方があるところがポッチャの魅力です。

今回、車椅子の利用者の方もおられ、自分の力だけでボールを思った位置に投げることが難しい方もおられました。ポッチャには、ランプ（勾配具）という桶のようにボールを一方向に転がすことのできるもので作成されたスロープの補助具があり、ボールを勾配のある場所に置けば、重力によって勝手に転がってゆくことを利用することができます。残念ながら、ランプはなかったのですが、リーダーの学生たちが、レスキューベンチをランプ代わりに利用して、誰もが楽しめるよう工夫していました。ルールや道具を工夫することによって、障がいの有無や種別などにかかわらず、誰もが一緒に楽しむことができるのが障がい者スポーツの醍醐味だと思いますが、学生たち

の工夫により、まさにその場面を目の当たりにし、改めてその魅力を感じたとともに、学生たちのこれまでの経験から生み出された発想力の豊かさに感銘を受けました。

#### ・サウンドテーブルテニスと卓球バレー

卓球に似ていますが、ネットの上ではなく、下を音のなる球をラケットで転がして通し、ラリーを行いました。卓球バレーは、バレーボールの要領で、チーム内でパスを回して相手コートに返すもので、両方とも車椅子や椅子に座って行うことができます。サウンドテーブルテニスとは、視覚障がいのある人が行うスポーツなので、通常はアイマスクを付けて行うのですが、今回は付けずに行ったため、卓球バレーとの違いがあまりなくなりましたということも学生たちは反省点として挙げていました。しかし、サウンドテーブルテニスは、通常の卓球のラケットのラバーを外し、音が出やすくなり、卓球バレーは、ペットボトルでラケットをつくるなど、プレイしやすいように手づくりで工夫がなされており、参加者の方は、お互いに声をかけ合い、楽しく交流しながら、ボールを打ち返しあっておられたのが印象的でした。

#### ・くつしたまいれ

一般的な玉入れと似ていますが、投げ入れる玉は靴下を丸めたもので、同じ柄の靴下をセットにして丸めてカゴへ投げ入れます。車椅子利用の方など、靴下を拾うのが難しい場合は、あらかじめ複数の靴下を配っておくなどの工夫をしていました。また、カゴをもった学生も入りやすいように回転するなど盛り上げ、今日一番と面白いほど、大きな笑い声で体育館が包まれました。

#### ・展示「ちぎり絵」

模造紙に大きな木の絵を準備し、そこに様々な色の色紙を手でちぎって貼り付けていただき、彩り豊かな「ちぎり絵」が完成しました。色も大きさも自由。個性豊かな木ができました。

#### ・本取組を通して

夢ふうせんの方からは、「利用者の皆さんも楽しんでいました。学生がこのようなイベントをつくっていることを大変心強く思います」という言葉をい

ただきました。また、各キャンパスから様々な学部の学生が参加していたことも喜んでくださっていました。そして、「今回を通して福祉施設で働くということにも少し関心をもってもらえたら」「今後いろいろなところで連携できれば」との今後に向けてのメッセージもいただきました。

また、今回の取組は、大学にとっても大変有意義であったと感じます。地域の方にとっては、すぐ目の前にあるのに、なかなか入ることのできない「大学」という特別な場所を少し身近に感じていただけたのではないかと思いますし、今回の取組を通して、車椅子の方の動線を考えたことで、キャンパス内のバリアについても様々な職員の方と一緒に考えることができました。こういったつながりが、例えば災害時等にも生きてくるのではないかと思います。

本取組を通して、学生たちが大学と地域のつながりを生み出してくれたことにより、さらに地域と共に歩む大学となるための大きな一歩になったのではないかと思います。



「くつしたまいれ」の様子



完成した「ちぎり絵」